

第 14 回 都市計画道路殿町羽田空港線ほか  
道路築造工事に係る河川河口の環境アドバイザー - 会議

(令和 3 年 12 月 8 日開催)

主な意見、指摘事項と対応について

1 . 前回からの継続事項について

意見・指摘事項	対応
<p>&lt; 鳥類 &gt; (第 12 回アドバイザー会議)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和 2 年冬季のシギ・チドリ類の減少の考察結果の対応として、全国的な調査結果や首都高速道路(株)の調査結果を整理し、経年変化を確認すること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大師橋の鳥類の調査結果の整理を試みましたが、種数のみの調査のため個体数まで評価が困難という結果でした。</li> </ul>

2 . 環境対策の現況報告

意見・指摘事項	対応
<p>&lt; アユの回遊調査 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アユ回遊調査の表-4 において、アユ個体数の合計を算出する意味はあるのか。同じ個体を二重計測しているのではないか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・採捕したアユ個体は分類のため持ち帰っているため二重計上はありません。</li> </ul>
<p>&lt; 橋梁下のヨシ草長調査 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・橋梁下のヨシに住む生物の調査方法について市民団体へ依頼して実施することを検討願いたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係部局と調整し、第 15 回会議までにどのように進めていくか検討・回答します。</li> </ul>

3 . 令和 3 年度秋季定期環境モニタリング調査実施状況報告

意見・指摘事項	対応
<p>&lt; 地形 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・P.9 右上の埋戻し後の図において、測線 No.7 ではすでに窪みが発生しているようにも見られるが、これはどういうことなのか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・埋戻し基準高である AP±0m に対する出来形管理基準は±50cm であり、この部分は低めの-0.5m 下限値となっている。そのため、埋戻し時点で少し窪んでいる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の結果は、もともと出来形管理基準内での凹凸は存在しており、その位置は変化しているものの、この期間中に大きく沈下したということでしょうか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その通りです。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・7 月と 10 月のコンター図を比較すると窪みの位置は変化しているが、水深は大きく深くなっていないということか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その通りです。1m などのオーダーで下がったということはありません。</li> </ul>

意見・指摘事項	対応
<p>【埋戻しの勾配について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の埋戻しの勾配について、緩勾配にすべきだったかということ、今回の施工・環境条件において断言できる明確な理論はないため、どうしても試行錯誤が必要になってしまうことだと考える。また、今回の埋戻し材としては、元々の浚渫土砂を保管しておいて埋め戻すため、土量に限界はあり、今回の干潟の造成として自然が相手であるため、自然状態へと近づけるが、最終的には自然の力に任せるという内容で合意ができて施工を行ったと考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ご助言ありがとうございます。</li> </ul>
<p>【干潟の再埋戻しについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和元年の東日本台風によって河床が埋まったこともあり、下がった干潟については、今後の土砂供給による収束を持つしかないと考える。また、人為的な埋戻しによる対応も可能だが、コストパフォーマンスを考えると、自然に任せた方が良いと考える。また、河口域は動的な底質環境であるから待つしかないと考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ご助言ありがとうございます。</li> </ul>
<p>【今後のモニタリングについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本現象の生態系への影響について現段階では考察が難しい。干潟だけが生物の住むところではなく、水質について酸素欠乏に至ってないのであれば、水深が深くなったことで一定度の生物が付くと考える。ただし、地形が変わる速度が早ければ復元速度も少し遅くなる。また、上流側が今回の調査の結果で、緩斜面になっていることもあり、上流側が干潟として機能することもある。後々のためにも上流側を含めてモニタリングを行った方が良い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・干潟の地形変動について、上流側も含めてモニタリングを行います。</li> </ul>
<p>&lt; 鳥類 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・鳥類への影響はカモメに現れてきていて、桁下を潜るようになってきたということによいか。バードストライクの観点では、下を通過した方がよいと考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その通りです。桁下を潜って行き来をしています。</li> </ul>
<p>&lt; 魚類 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・P.27 表 5-1(2)のオイカワの生活型は淡水に修正すること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・該当部分を修正します。</li> </ul>
<p>&lt; 底生生物 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・時系列変化を取りまとめるときに、出現種名を断り書きで記載し、属で統一すること (スナウミナナフシ属、<i>Hediste</i>属)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・該当部分について修正して取りまとめます。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季の市民調査ではヤマトシジミの稚貝が確認されたが、秋季ではヤマトシジミがほとんど出現していない。工区全体でこの間にイベントが発生した可能性はあるのか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アサリの出現は確認されていますが、シジミは確認されていません。また、法面部分の減少以外は特別なイベントは確認されていません。</li> </ul>

以上